

# 「黎明館の現在、これから」

「親しまれ、愛される館」を目指して!!

灰床 義博

はじめに

黎明館は、明治維新百周年（昭和四十三（一九六八）年）を記念して、昭和五十八（一九八三）年十月、かつての薩摩藩主・島津氏の居城であった鹿児島（鶴丸）城本丸跡地に開館した人文系の総合博物館で、鹿児島の歴史、考古、民俗、美術・工芸を紹介している。平成二十八（二〇一六）年十二月現在の所蔵資料は、約十七万八千点であり、このうち約三千五百点を常設展示している。

平成八（一九九六）年十月には、大型模型の増設などにより、常設展示をリニューアルし、分かりやすい展示に努めている。その後、平成十三（二〇〇一）年六月には、文化財保護法第五十三条に基づく公開承認施設として承認され、さらに、平成二十七（二〇一五）年四月には、博物館法第二十九条に基づく博物館相当施設として指定されている。

なお、平成二十八（二〇一六）年十月には、開館三十三周年を迎えたところであり、平成二十九（二〇一七）年一月までに、九百四十八万人の方々に御来館いただいている。

これからも、当館の運営については、「No Attack No Chance!!」をモットーに、鹿児島の歴史・文化について、当館のこれまでの実績を踏まえ、所蔵している貴重な資料を大切に保存・継承

しながら、館内の各セクションが密接に連携・協力し、一体となって、皆様に「親しまれ、愛される館」を目指し、積極的な取組と情報発信に努めることとしている。

今回は、当館を巡る当面の状況や、平成二十六（二〇一四）年四月の自身の館長就任以来の取組の実績、さらには、今後に向けた運営の課題と、これらを踏まえた対応の基本的な考え方などについて御紹介し、館内スタッフの意識の共有を図るとともに、県民の皆様などの当館への理解促進の一助になればと願っている。



## 一 当館を巡る当面の状況

近年の実績を含め、当面の状況としては、次のようなものがある。

※平成二十七年

- ・薩摩藩英国留学生渡航百五十周年
- ・「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産登録
- ・国民文化祭かごしま大会の開催

※平成二十八年

- ・薩長同盟締結百五十周年

※平成二十九年

- ・大政奉還百五十周年
- ・第二回パリ万博薩摩藩出展百五十周年

※平成三十(二〇一八)年

- ・明治維新百五十周年
- ・NHK大河ドラマ「西郷どん」の放送
- ・黎明館常設展示一部リニューアル・オープン
- ・明治維新百五十周年記念黎明館企画特別展
- ・「幕末薩摩と明治維新」近代日本の黎明」(I)の黎明館開催

※平成三十二(二〇二〇)年

- ・鶴丸城御楼門・御角櫓竣工

## 二 当館における取組の前提・課題・方向性

当館においては、今後とも次のことを十分踏まえ、適切に取り組む必要がある。

- ① より専門的な調査・研究に努めるとともに、より易しく楽しい解説・説明に努める。
- ② よい物(資料・人材・歴史・立地)を十分に活かしきり、伸びしろ・発展可能性を追求する。
- ③ 館全体としての共通理解に努める。(総論ベース・各論ベースともに)
- ④ 時代のニーズ・新しい課題に積極的にチャレンジし、柔軟に対応する。
- ⑤ 初期設定には時間が少々かかるが、それを理解した上での業務の効率化に努める。
- ⑥ 館全体として、また、課室内でのガバナンスの徹底に努める。

## 三 対応

当館においては、前記一・二を踏まえ、現在、次のような対応を進めている。

- ① 意識・情報の共有化
  - ② リーダーシップの発揮
- a 館長としての館運営の基本的な考え方をしっかりと伝えるため、

年度始め、仕事始め、毎月の行事打合せなどの際には、「館長メッセージ」・「館長雑感」などのペーパーを作成・配付

b 「黎明館だより」や各種情報誌・機関誌などへの積極的な寄稿、外部での講演、マスコミを通じた情報発信による、館内職員のモチベーションアップと、館長の考え方の共有化

c 新規の取組については、スケルトンを作成し、検討の方向性を具体的にアドバイス

③ ①・②と並行して

a キーパーレーヤーの育成

b 業務のアウトソーシング化

④ 一方で、プライド・専門性も大切に

昼食時間には、館長室にて、それぞれ持参の昼食をとりながら、意見交換

#### 四 平成二十六年度から現在までの主な取組

(一) 継続事業(平成二十五年度以前からの主なもの)

① 資料の収集・保存・展示

② 調査・研究

③ 企画特別展・企画展の開催

④ 講演会・講座の開催

⑤ 『鹿児島県史料』の翻刻・刊行 ※(参考) 参照

⑥ 研修(教員向け)

⑦ 博物館実習(学生向け)

⑧ 各種レファレンス

⑨ 「黎明館だより」の発行

⑩ 鹿児島(鶴丸)城跡の保全整備

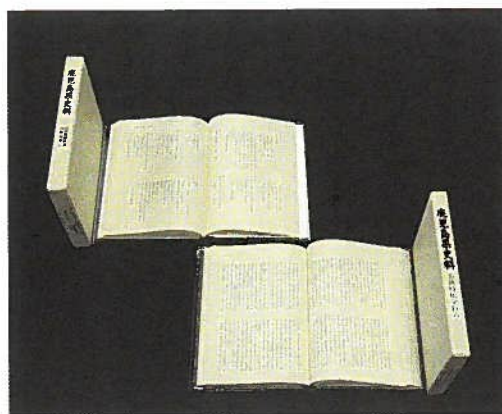
(参考) 『鹿児島県史料』の翻刻・刊行

本県の歴史の学術的研究と教育・文化活動の発展に寄与することを目的に、昭和四十三年度から始め、平成二十八年まで九十四冊(旧記雑録(平安末〜江戸期の史料)・幕末維新(明治維新期を中心)、江戸後期〜明治期の史料)各四十七冊)を刊行した。

これらは、当館の歴史展示や、調査研究を支える基礎資料になるとともに、学界でも高い評価を得ており、今後も、翻刻・刊行を続けていきたいと考えている。

なお、私自身の経験では、本県の文化行政の中で、国内外の有識者・専門家の皆様などからは、この『鹿児島県史料』の翻刻・刊行と霧島国際音楽祭が、その高度な専門性と継続性において、高く評価いただいている代表的な取組例である。

このことは、県民の皆様にも、より一層広く情報発信する必要があるものと考えている。



(二) 新規事業（平成二十六年以降の主なもの）

- ① これまでの考え方や事業などのレビュー ※（参考）参照
- ② 黎明館研修（ホテル・民間企業などのスタッフの参加（組織単位））
- ③ ウィークリー・ミュージアムガイド（個人の参加）
- ④ 子どもの日・夏休み／黎明館キッズフェスタ（子どもたちの参加）
- ⑤ ボランティアとの協働
  - a 清掃ボランティア（屋外ボランティア）
  - b ミュージアムパートナー（屋内ボランティア）
- ⑥ 積極的な情報発信（鹿児島県HP（黎明館）、マスコミ、講演、寄稿など）
- ⑦ 文化ゾーンの取組の充実（エリアとしての活動の充実）
- ⑧ 黎明館ナイトミュージアム・コンサート（霧島国際音楽祭コンサート）の開催
- ⑨ 鹿児島県博物館協会（会長・事務局館）としての積極的な取組
- ⑩ 黎明会（有識者を招いて個人的に主宰している勉強会）の開催

（参考） 「これまでの考え方や事業などのレビュー」

下記のほとんどは、新規ニーズに対応し外延的に作業範囲を広げたものではなく、これまでに行っておくべきものであったと考えている。

今後は、当館の全てのスタッフが、自らのこととして主体性を発揮し、これまでの実績も踏まえ、様々な課題や調査・研究などに、より一層自主的・積極的に取り組むことを期待しているところである。

- a 博物館相当施設の指定
- b 各種管理・運営規程の改正・制定

c 企画特別展開催の毎年度のテーマ設定の基本的な考え方の整理  
d 文化ゾーンの連携強化

e 積極的な情報発信

f 鹿児島県博物館協会（会長・事務局館）としての機能発揮

g 黎明館専門委員会の効果的な開催

h 各種想定問答の全面見直し

平成二十六年以降、以上のような取組を積極的に展開できていることについては、当館職員の熱意・努力に心から感謝している。

五 今後の取組（実績を含む。）

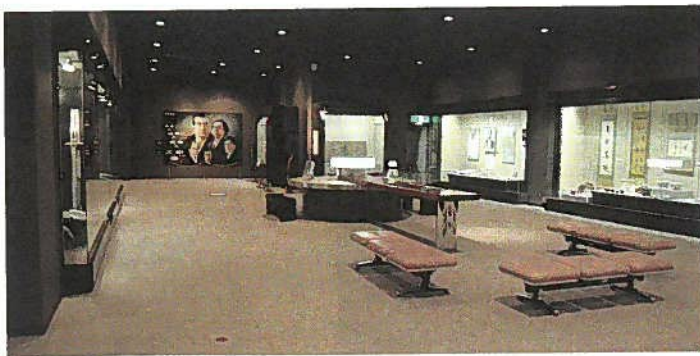
(一) 明治維新百五十周年に向けて

当館では、明治維新百周年を記念して建設されたという経緯も強く意識し、いよいよ来年に迫っている明治維新百五十周年に向け、様々な取組を積極的に展開することとしている。

① 常設展示一部リニューアル

現在、平成三十年の常設展示一部リニューアルに向け、作業を進めている。

具体的には、当館で収集した資料などを活用し、最新の研究成果や、新しい展



示技術を導入して、より分かりやすく、楽しみながら鹿児島県の歴史と文化を学べるようにするため、常設展示を次のように拡充・新設することとしている。

a 明治維新において鹿児島が果たした役割

b 明治日本の産業革命のリーダー役を担った鹿児島の先進的な取組

(世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」関連)

c 明治維新と鹿児島の市井の人々の暮らし

(「明治維新百五十周年記念事業」明治維新と郷土の人々」関連)

また、常設展示場などにおいては、県内・国内はもとより、アジアを中心とする国外からの入館者の皆様に分かりやすいサイン・音声ガイドを整備したいと考えている。

このため、平成二十八年度には、館内での検討、先進施設の調査、当館専門委員や有識者などの助言・指導をいただきながら、基本的な考え方を取りまとめ、基本設計を終えたところであり、今後、実設計、展示資料確保、複製・キャプション等作製、展示改装工事などに取り組むこととしている。

## ② 企画特別展

ア 平成三十年度

明治維新百五十周年記念黎明館企画特別展

a 「幕末薩摩と明治維新」近代日本の黎明」(Ⅰ)

明治維新百五十周年を踏まえた当館としての調査・研究の方向性、将来に向けたメッセージについては、明治維新から百五十年の間の国内・国際情勢の変化や、その中で我が国の立場の変化なども多

面的に踏まえ、エビデンス(根拠資料)も十分に検証しながら、問い直し、再構築していく必要があるものと思っている。

また、この二十一世紀だからこそ、また、この百五十年間の実績(得たもの・失ったもの・変わらないもの)があるからこそ、発することのできる今日的なメッセージがあるものと思っている。

このような作業にも、当館として積極的に取り組んでいきたいと考えている。

b 「薩摩焼プロジェクト」展覧会

海外の美術館等が所蔵している、第二回パリ万博などに出版された薩摩焼に関する展覧会を開催する予定である。

当館担当者は、平成二十九年一月にイギリス・オーストリア・フランスの、また、三月にアメリカの美術館などを訪問し、出展に向けた作品の調査・意見交換を始めたところである。

私自身、平成十九(二〇〇七)年から平成二十(二〇〇八)年にかけて開催した、薩摩焼のパリ・セーブル展の事前調整のため、鹿児島県観光交流局次長として、パリなどを訪問したが、そのような経験なども踏まえながら、魅力ある企画特別展を開催したいと考えている。

イ 平成三十一年度

明治維新百五十周年記念黎明館企画特別展

「幕末薩摩と明治維新」近代日本の黎明」(Ⅱ)

なお、平成三十年度の企画特別展の展示内容などを総合的に勘案し、テーマ・内容を見直す場合がある。

## ③ 企画展

平成二十七年は、薩摩藩英国留学生渡航百五十周年企画展（使節の一人が、NHK連続テレビ小説「あさが来た」で人気となった五代友厚）として「幕末薩摩の留学生」を、平成二十八年は、薩長同盟締結百五十周年も踏まえ、企画展「玉里島津家資料から見る島津久光と幕末維新」を開催した。

平成二十九年には、現在、「島津氏本家と支流諸家」を開催しているところである。今後、大政奉還百五十周年などを、小松帯刀の立場から概観する内容のものなどを開催する予定である。

## (二) 鹿児島（鶴丸）城跡の保全整備

県指定史跡である鶴丸城跡（昭和二十八（一九五三）年指定）の石垣には、樹根の張り出しなど様々な要因による部分的な孕み出しや隙間などが生じている。

このため、現在、史跡の保全を目的として、調査・測量などを行い、樹木の移植、記念碑の移設を実施しながら、埋蔵文化財の発掘調査を進め、御楼門部の必要な箇所について、修復工事を実施しているところである。

なお、県と民間による御楼門建設協議会が進めている御楼門建設は、県による御角櫓建設とともに、平成三十二年三月の完成を予定している。

また、これまでに、御楼門部の石垣の修復工事では、表面に付着した苔などの除去作業が進み、見えなかった石表面のノミ跡などが明らかになっている。さらに、発掘調査では、加工した石を緻密に組み合わせ整備された石塁や排水溝跡、兵具所の礎石が新たに発掘されたところがある。

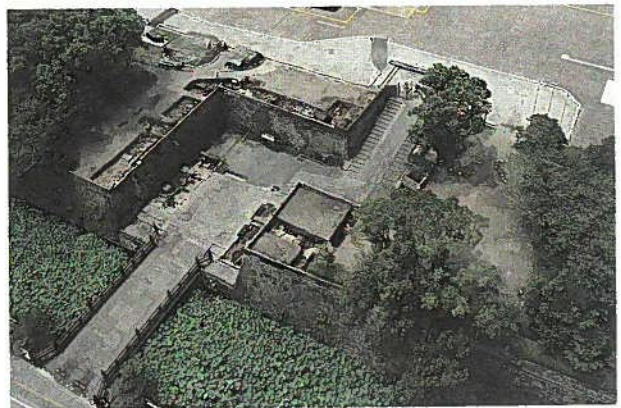
こうした新たな発見などを御覧いただき、鶴丸城跡に対する理解を深めていただく絶好の機会と捉え、平成二十八年十二月三日に、県民の皆様などに公開・説明する「鹿児島（鶴丸）城跡現地説明会」を開催した。

当日は、「石塁と排水溝跡」、「能舞台跡」、「二之丸側石垣」、「御楼門跡」、「横矢掛り跡」の五箇所を説明したが、天気にも恵まれ、関東方面など県外を含め、五百人ほどの皆様に御参加いただき、関心の高さを改めて実感したところである。

参加された皆様には、江戸時代の築城以来、幕末・明治、さらには昭和四十年代まで一部残されていた様々な遺構を御覧いただき、鹿児島の近世から近代・現代までに想いを馳せていただけたものと思っている。鹿児島のレガシー、先人の知恵・工夫を体感いただくとともに、今後に向かっの学びの機会、県民の大切な財産・宝を次世代に引き継ぐ契機となったとすれば幸いであった。

## (三) 「黎明館研修」の開催

「黎明館研修」は、平成二十六年十月にスタートし、四半期に一回開催しているところであり、毎回、二十名から四十五名程度の皆様に参加いただき、平成二十九年一月までに十回開催している。



私は、鹿児島県の歴史・文化について、地元の皆様にも、しっかりと知っていただくことが必要であるということ、また、このような歴史・文化の日頃の具体的な活動に繋げていくことが重要であるということなどを常々申し上げている。そういう中で、当館は、「鹿児島の歴史・文化を知る」ための教材そのもの、教材の宝庫でもあることから、ホテル・企業の皆様などにも、研修の場として積極的に活用いただくよう強く働きかけ、この「黎明館研修」を開催している。



具体的な日程については、午前10時からの開講式でスタートし、オリエンテーション、講演、館外史跡等（敷地内）視察、昼食・休憩を挟み、午後一時から、館内常設展示視察、企画展視察、自由観覧、体験学習（鎧・兜の試着など）、感想文作成と続き、午後三時三十分には閉講式を終えている。

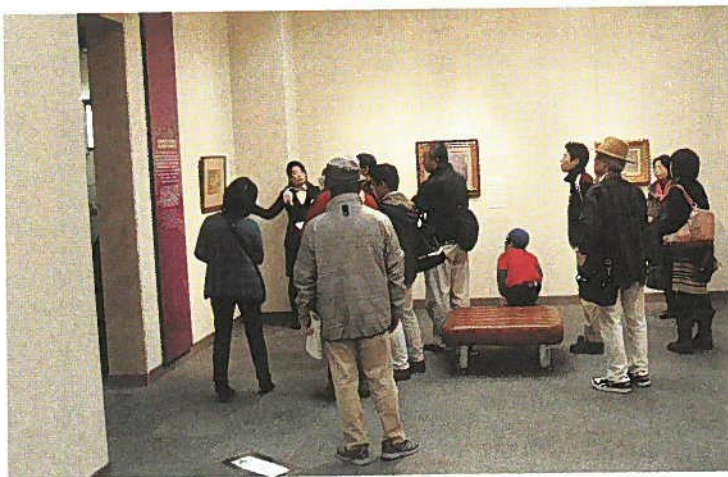
特に、本県では、平成二十七年には、「明治日本の産業革命遺産」が世界文化遺産に登録され、国民文化祭も開催された。平成二十八年は、薩長同盟締結百五十周年であり、さらに来年は、明治維新百五十周年と続く。このような絶好のチャンスを見逃さず最大限活用し、鹿児島県の豊かな歴史・文化を、国内外の皆様にも積極的に情報発信するためにも、この研修を通じ、今一度、郷土の歴史・文化を学び、再確認・再発見いただければと考えている。

ばと考えている。

#### （四）「ウィークリー・ミュージアムガイド」の開催

当館では、現在、常設展示場の観覧者増に向け、様々な取組を展開しており、その一つが、平成二十八年二月二十一日から、毎週日曜日に開催している「ウィークリー・ミュージアムガイド」である。

これは、午前十一時からの約一時間、当館展示解説員が展示資料を分かりやすく解説するもので、歴史コースと文化コースを隔週実施している。定期・定時に実施することにより、一人でも多くの皆様に、特に、ホテル・旅館に宿泊される観光客・ビジネス客の皆様などにも、お越しいただくことを願っている。



### (五) 子どもの日・夏休み／黎明館キッズフェスタ

当館では、現在、常設展示場の観覧者増に向け、様々な取組を展開しており、その一つが、平成二十八年の五月五日の子どもの日と、七月三十一日・八月七日の夏休みに開催した黎明館キッズフェスタである。

常設展示や敷地内史跡などの案内、クイズ、鑑・兜試着などを楽しんでいたところである。鹿児島県の豊かな歴史・文化に幼い頃から親しんでいただくことを願っている。



### (六) ボランティアの皆様との協働

当館では、平成二十七年から、「清掃ボランティア」と「ミュージアムパートナー」の二つの活動に取り組んでいる。

大きなトレンド・時代潮流としては、今日、官民協働・PPP (Public Private Partnership) とような取組の必要性が強く要請されている。また、博物館や美術館などと、それぞれの地域の皆様との連携強化の必要性も強く指摘されている。

この二つの活動は、当館においても、そのような観点から取組を展開することにより、開かれた館の運営、より積極的に申し上げると、民間の皆様と連携・協働し、地域に密着して館の運営を行うことによって、当館を「親しまれ、愛される館」としていききたいとの思いから実施して

いるものである。

また、いずれも、鹿児島(鶴丸)城・旧制七高造士館など、当館敷地の歴史に興味を持たれ、同時にボランティア活動に積極的に取り組もうとされる皆様に行っていたくものであり、このような活動を通じて、当館の史跡や当館自体、さらには鹿児島県の歴史・文化に対する想いを深め、当館を身近なものに感じていただきながら、相互の関係を深め、「黎明館のよきパートナー」、「黎明館ファン」になっていただくことを願って実施しているものである。

いずれの活動も、社会人や学生、退職された皆様などに参加いただいております、特に「清掃ボランティア」の場合、民間企業のボランティアグループにも参加いただいている。

#### ① 「清掃ボランティア」の実施

平成二十七年二月から始め、九月、平成二十八年二月・九月、平成二十九年二月の五回実施し、毎回二十名から四十名程度の皆様に参加いただいている。具体的には、午前十時から、開始式を行い、敷地内において、一時間二十分程度、ゴミや落ち葉拾い、桜島降灰除去などの清掃を行っていた。その後、記念碑や遺跡などについての解説を行い、最後に、記念写真を撮影し、正午までには終了している。





## ② 「ミュージアムパートナー」の実施

平成二十七年五月から始め、図書などの整理や広報活動などに御協力いただいている。具体的には、原則として土曜日の午前九時三十分から二時間程度、展示準備室の整理や、古文書講座・講演会などの準備、企画展・企画特別展などのチラシ類の整理、黎明館日より当館刊行物の発送準備、図書整理や、登録、配架、各種報告書の整理、新聞スクラップ、シール貼り、封筒作りなどを行っていただいている。平成二十七年度は九回実施し、八名の皆様に参加いただいたところであり、平成二十八年度も十回実施し、九名の皆様に参加いただいたところである。



## (七) 積極的な情報発信

当館では、現在、常設展示場の観覧者増に向け、情報発信にも積極的に努めている。

例えば、企画展や企画特別展、講演会、講座、さらには、常設展示場の一部展示替え（概ね毎月一回実施）の情報などを、鹿児島県HP（黎明館）や紙媒体でタイムリーに紹介している。また、新聞・テレビ・ラジオなどの報道・出演は勿論、様々な講演会での講演や、各種情報誌な

ども寄稿するなどして、積極的な情報発信に努めている。

## (八) 文化ゾーンにおける取組

当館周辺の文化ゾーンにおける取組については、当館だけではなく、周辺の鹿児島県立や鹿児島市立の文化施設のほか、民間の文化教養施設、商業施設などとも相互に連携・協働し、相乗効果も発揮しながら、多様な魅力の提供に努めることとしている。

このためには、民間の皆様との連携・協働が重要であり、この取組も、まさに官民協働の取組の一例とも言えるものであると考えている。

このため、平成二十六年年度から、周辺の県・市立の文化施設、民間の文化教養施設、商業施設などの皆様にお集まりいただき、「語る会」を開催している。この「語る会」では、平成二十七年年度から、会の総意を踏まえ、関係先に要望などを行っているところである。この要望の実現などに向けては、今後とも、根気強い取組が必要であると考えている。

## (九) 「霧島国際音楽祭」の開催

平成二十七年七月二十一日に、当館としては初めての霧島国際音楽祭「黎明館ナイトミュージアム・コンサート」を開催いただいた。コンサートは、当館二階の常設展示場内に折りたたみイスを並べるなどした手作り感溢れるアットホームな雰囲気の中で行われ、八十人定員が満席となった。

会場となったフロアは、兄・島津斉彬の遺志を受け継ぎ、幕末・維新期に活躍した島津久光が新たに興した玉里島津家の資料や、西郷隆盛が城山にて最期を迎える前夜に、その音を聴いたかもしれないと言われて

いる薩摩琵琶の名器とされる「木枯」などを展示している。薩摩のクラシックの世界の中で、薩摩藩英国留学生などの郷土の先人・偉人達にも想いを馳せ、また敬意を込めて選曲された、ヴァイオリンとチェロの若き二人の女性演奏家の「愛の挨拶」(エルガー)や「夏の名残りの薔薇」(エルンスト)などの素敵な調べを楽しんでいただけなものと思う。

なお、コンサート終了後には、多くのお客様に「素晴らしい雰囲気の中でコンサートでした。来年も楽しみにしています。」との言葉もいただいた。当館の新しい魅力が生まれ、輝いた素敵な一夜だった。

平成二十八年七月十九日には、第二回目の霧島国際音楽祭「黎明館ナイトミュージアム・コンサート」を開催いただいたところであり、百人定員の満席の皆様には好評であった。



組  
(十) 鹿児島県博物館協会(会長・事務局館)としての積極的な取

県博物館協会は、昭和三十九(一九六四)年十月に発足し、平成二十六年に五十周年を迎えた。当館は、会長と事務局を務めている。

平成二十六年度は、県博物館協会発足五十周年の記念講演会を開催するとともに、「ミュージアムガイド」(会員施設の紹介資料)の全面改訂

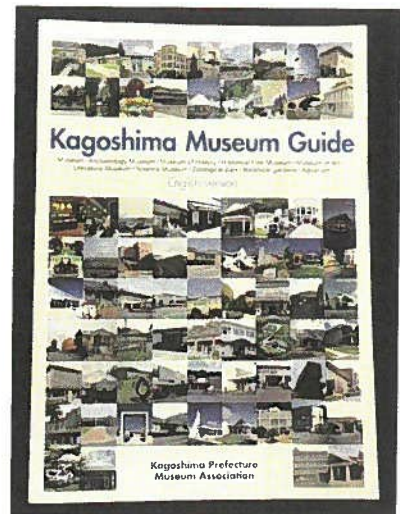
も行ったところである。なお、日本博物館協会からの情報も、会員施設に速やかに提供するとともに、大規模災害対応の意見集約・提示なども積極的に行っている。

さらに、平成二十八年度には、県博物館協会をベースとした「鹿児島県ミュージアム国際化実行委員会」において、文化庁からの助成金を活用し、「ミュージアムガイド」の英語版を作成したところである。

(十一) 黎明会

以上のような取組のほか、個人的には、有識者を招いての勉強会である「黎明会」を主宰している。

これは、概ね二ヶ月に一回の割合で、午後六時三十分から一時間程度、当館内にて開催している。会員は、当館職員を含む県職員のほか、文化施設・団体職員や、小・中・高教職員、ホテル・旅館・百貨店・その他民間企業スタッフ、マスコミなど、異業種の約百二十名である。ま



た、講師は、ホテル・民間企業経営者や、観光関係者、地域活性化リーダー、金融関係者、文化人、大学教授など、私自身が日頃お付き合いいただいている幅広い分野の方々である。当館運営を含め、多彩な観点から、楽しく、かつ建設的なアドバイスをいただいている。

なお、この「黎明会」でも、全ての講師の皆様が、共通に、地元の我々自身が「鹿児島を知る」ことの大切さを強調されている。

## 結び

黎明館を、より一層多くの皆様に知っていただき、御来館の上、鹿児島の豊かな歴史・文化に触れ、しっかりと理解していただくことで、鹿児島の将来に発展的に繋げていきたいと思っている。このためにも、本県の歴史・文化を情報発信し、県民の皆様はもとより、県外・国外の皆様にも「親しまれ、愛される館」を目指し、更なる魅力づくりに努めていきたいと考えている。

私自身、これまで、各国立博物館を始め、県内外の各都道府県・市町村・私立の博物館・美術館などの館長・副館長の皆様などを訪問し、意見交換などをさせていただいているが、今後とも、これらの博物館・美術館などの皆様との「御縁」を大切にネットワークを拡充し、連携・協働に努めることとしている。

さらに、平成二十六年度以来、連携を呼びかけている鹿児島大学も、平成二十八年七月に、同大学で開催されたトップセミナーにおいて、私自身が講演させていただいたことも踏まえ、平成二十九年度以降に向け、

具体的な取組がスタートしたところである。かつて、よく言われていた「知的クラスター」の形成に向け、積極的に対応したいと考えている。

引き続き、当館ファンクラブの組織化などの課題も意識しつつ、「チーム黎明館」として、関係機関・団体などとの協議・調整にも努めながら、幕末維新期を鮮やかに駆け抜けた薩摩の先人達の「高い志」をもって取り組んでいきたいと考えている。

今後とも、全ての関係の皆様のご指導・御支援・御協力をよろしくお願ひしたい。

(はいとこ よしひろ 本館館長)